大菩薩峠

（十六）

胆吹の巻

中里介山

時代小説文庫

時代小説文庫　16

大菩薩峠（十六）　胆吹の巻　全二十冊

昭和五十七年六月三十日　初版発行

著　者　中里介山

発行者　原　秀行

発行所　株式会社富士見書房

東京都千代田区富士見一―十二―十四

電話東京二六一―五三七五（代表）

〒一〇二　振替東京⑦八六〇四四

印刷所　暁印刷　製本所　大谷製本

装幀者　熊谷博人

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0193-600116-7440(0)

時代小説文庫　16

富士見書房

大菩薩峠（十六）

胆吹の巻

中里介山

目次

胆吹の巻　七
新月の巻　一七三
机龍之助と尺八　西尾忠久　四三八

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

大菩薩峠

（十六）

胆吹の巻

胆吹の巻

一

宇治山田の米友は、山形雄偉なる胆吹山を後ろにして、しきりに木の株根を掘っています。

その地点を見れば、正しく胆吹山の南麓であって、その周囲を見れば荒れ野原、その一部分の雑木が斫り倒され、榛莽荊棘が苅り去られてある。そのうちのある一部分に向かって鍬を打ちおろしつつ、米友がひとり空々漠々として木の根を掘りつつあるのです。

打ち込む鍬の音が、こだまを返すほど森閑たるところで、ひとり精根を株根に打ち込んで、側目もふらず稼いでいるのは、この木の株根に執着があるわけではなく、こうして幾つもの株根を掘り起すことの目的は、この土地を開墾する、つまりあらくを切るための労力でなくて外に理由のあるはずはありません。

米友が胆吹山の下で開墾事業をはじめた。

これは、これだけの図を見れば驚異にも価することに相違ないが、筋道をたずねてみれば甚だ自然なものがあるのです。それは後にわかるとして、こうして米友が一心不乱にあらくを切って

いるとき、

「米友さん――」

そこへ、不意に後ろの林から現われたのは手拭いを姉さん被りにして、目籠の中へ何か野菜類を入れたのを小脇にして、そうしてニッコリ笑って呼びかけたのはお雪ちゃんでした。

「御精が出ますね」

「うん」

米友も鍬を休めていると、お雪ちゃんはだんだん近寄って来て、

「少しお休みなさい」

「どーれ」

と言って、米友は鍬を投げ捨てて、まだ掘り起さない掛けごろの一つの木株へどっかと腰をおろしたが、さて、こういう場合に、抜かりなく、間のくさびにもなり、心身疲労の慰藉ともなるべき――アメリカインデアン伝来の火付草をとってまず一服という手先の芸当が米友には出来ません。腰をおろしたまま、両手を膝に置いて、猿のような眼を見張って、お雪ちゃんの面を見つめたままでいますと、

「友さん、一ついかが」

と言って、お雪ちゃんが目籠の中から、珊瑚の紅のような柿の実を一つ取り出して、米友に与えました。

「有難う」

米友は、腰にさしはさんでいた手拭いを引き出して、今、お雪ちゃんから与えられた珊瑚のような柿の実を、一ぺん通り見込んでから、ガブリとかぶりついて、歯をあてるとガリガリかじり立てました。

「甘いでしょう」

「甘(あ)めえ」

「もう一つあげましょう」

「有難う」

お雪ちゃんは、まだ幾つも目籠の中に忍ばせているらしい。それを一度に、幾つかを与えては、当座の口へ持って行く手順に困るだろうと心配して、わざわざ一つずつ目籠から出しては米友に与えるものらしい。

「むいてあげましょうか」

「いいよ、いいよ」

お雪ちゃんは摘み草用の切出しを目籠の中からさぐり出して、米友のために柿の実の皮をむいてやろうと好意を示すのを、米友はそれには及ばないと言いました。それはそうです。米友として、皮と肉との間のビタミンを惜しんでそうするわけではないが、この珊瑚のような小粒の柿の実を、お上品に皮を剝いたり、四ツ割りにしたりして、しとやかに口中へ運ばせるなんていうことはガラにないのです。米友に柿の実を当がっておいて、お雪ちゃんが、

「友さん――お前に聞きたいと思っていましたが、あのお嬢様という方は、一たい、あれはど

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ういう方なのですか」

柿の実で買収しておいて、それから探訪の鎌をかけようというお雪ちゃんの策略でないことは、わかっているし、米友とてもまた、昔噺の主人公と違って、柿の実や、握飯の一つや二つで買収される男ではないに定まっているが、つまり、お雪ちゃんは、この機会において、このあたり静かな、そうして、後ろには山形雄偉なる胆吹山が傲然として見張りをしている、新開墾地の人無きところで、日頃から、尋ねんと欲して尋ね得なかった腑に落ちない条々を、この人によって解釈してみたいと念じていた希望が、偶然ここへ現われただけのものでしょう。

「うん――あれはね」

米友の返事は存外素直に出ました。うっかり余計な質問をかけて、ぴんしゃんハネつけられないのが見っけものと、お雪ちゃんとしても、多少危惧してかかったのでしょうけれども、それが存外物やわらかな手ごたえがあったものでしたから、まず安心していると、

「あれはね、あれは変人だよ」

と米友が、まず断案を頭から、たずねた人の真っ向へおろしてしまったには、お雪ちゃんも面喰いました。

「変人！」

変人だか、常人だか、それを聞くのではない。そんな断案は、人に聞かなくても一見すれば誰でもわかることで、ちょっと付き合ってみさえすれば、お嬢様という人が――ここにお嬢様と呼ぶのは、かの有野村のお銀様の代名詞であることは申すまでもありません――常人でないことだ

けは、わからずにはおかないのですから、そんな無意味な断案を改めて米友から聞く必要はないのです。だが、相手を呼んで変人だという、この返答の主、すなわち宇治山田の米友がどれだけ常人に近いのだか、それを考えると多少はおかしくもなるのですが、これはこの返答の結論でも断案でもなくて、帰納と演繹との論鋒を逆につかったものとして見れば、もう少し希望を残して聞いていないわけにはいきません。

「うむ――変人だなあ、よっぽど変っているよ、あの娘もあれで家はなかなか金持ちなんだという話だがなあ」

それもわかってる、お銀様の背景に、偉大なる財閥ではない財力の権威があるということは、不破の関以来、お雪ちゃんもとうに心得ていることなのでした。

「え、え、それはわかってるのよ――お家は、甲斐の国で第一等のお金持ちだということもよくわかっております、わからないのはあの方の――そうですね、わからないと言えば、どこもこもみんな、わたしたちの頭ではわかりきれないところばっかりで、どこをどうとおたずねしていいかさえわからないのですけれど――」

「うむ、ありゃあね、心が傷ついているんだ、あれで、もとはいい娘だったんだってな、姿だってお前、いいだろう、あのとおり姿もいいし、心持も鷹揚で、品格があって、女っぷりとしてもさすが大家に生まれただけによ、上々の女っぷりだったんだそうだがな、面を傷つけられてから、それから心が傷ついてしまったんだよ」

「まア」

その時に、米友の返答がようやく、お雪ちゃんの壺にはまりそうになったのです。破題を先に、思いきり上げてしまったものですから、つづく調子の途惑いがしていたのを、ようやく糸にのりそうになったので、お雪ちゃんが喜んで、

「まア、お可哀そうにね」

「うむ、可哀そうと言えば可哀そうに違えねえかも知れねえが――可哀そうというよりは、我儘の分子が多いね、あれじゃあ可哀そうだと思っても、本当に憫んでやる気にゃなれめえ」

「そうねえ」

「面が傷ついたからって、心まで傷つけるには及ばねえのさ、人間は面よりは心が大事だからなあ」

ここに至って折角壺におさまりそうなピントが、平凡至極の俗理に落ちてしまいました。

人間は面よりは心が大事だからね――そのくらい見え透いたお世辞はないが、また醜婦に対する慰めの言葉として、これより以上、或は以外の慰め言葉というものはない。米友ともあるべき者が、こんな平凡極まる俗理を言い出したのは、ただ、ほんの間投詞の一種類に過ぎないことは分っていますから、お雪ちゃんを失望せしめることはなく、

「どうして、あんなにお面にお怪我をなさったのでしょうか」

「うん、そりゃあね、火傷をしたんだ、子供の時分に火ですっかり焼き立てたんだね、面を火で焼かれたというより、火の中からあの面を拾い出したんだね、それで五体は満足なんだが、あの面だけが――ところがねえ、お雪ちゃん、お前の前だけれども、女というものは、何のかんの

と言うけれど、つまるところは面だけが身上じゃねえのかなあ――」

「どうして、米友さん、そんなことを聞くの」

「どうしてだって、女という奴はね、面が悪ければ、五体を棒に振って一生を台無しにしてしまわなけりゃならねえのか、面のよし悪しの外に、女というものの身上はねえのかなあ、そうかと言ってまた面がよければいいで――楽あ出来ねえよ」

「ホ、ホ、ホ」

とお雪ちゃんが、少しおかしくなって、

「それは、面の大事なことは、女だって、男だって――人間でなくったって、みんな大事じゃありませんか、あのお嬢様がお小さい時分に、そんなむごたらしいお怪我をなすったから、それならお前さんの言うとおり、心も傷つくのは当り前じゃありませんか」

「ところがね、あのお嬢さんのは、ただ傷ついたんじゃねえ、傷ついてから、それから僻んだんだ、僻んでから、それから、そうさなあ、呪いだなあ、呪いになって、憎しみになって、復讐になって……今じゃ、手におえなくなっているというそもそもの起りが、火傷の怪我というのが偶然のあやまちの怪我じゃねえんだ、あの娘の継母という人が、自分の子に家をとらせてえがために、あのお嬢様を焼き殺そうとしたというのが、あの娘の呪いと、憎しみと、復讐のもとなんだ――もう今となっては誰が何と言ったって、どうにも手がつけられねえ」

「ですけれども、なかなか親切で、大腹中で、そうして物わかりがよくて、どこと言って……」

「それだそれだ、お気に入りさえすりゃあ、どこまでも、よくしてくれるし、悪い段になると、

人を取り殺さずにゃ置かねえ、で皆んな腫物のように、おっかながっているが、おいらなんぞは、ちっとも怖いと思わねえ」

「え、え、米友さんは、あのお嬢様のお気に入りのようですね、米友さんに限って、あのお嬢様の前でポンポン言っても、ちっとも気におかけなさらないようですけれど、他の者はみんなピリピリしているようです」

「何も、おいらは気に入られようと思って、おべッかを使ってるわけじゃねえんだが、皆んなお嬢様、お嬢様って、鬼か蛇でもあるように、おっかなびっくりしているのが、おかしくってたまらねえや――」

と、米友が得意になって、少しくせせら笑いの気持です。その時お雪ちゃんが胆吹山の方を向いて、

「友さん、あそこへおいでのはあれは、お嬢様じゃありませんか」

お雪ちゃんが、指したところの林の透間を米友が見ると、

「あっ！」

と舌を捲きました。

「こっちへおいでなさるようですね」

「うん」

「わたしは、お目にかからないほうがいいでしょう、さよなら、米友さん」

「まあ、いいよ」

「でも、何だか、わたし怖いわ」

「なに怖いものか――」

林の陰から姿を現わしたのは、お銀様と見られた人の姿ばかりではありません――そのあとに一頭の駄馬を曳いた馬子と、馬子に付き添って、手代風なのが一人、つまり、この二人一頭が、恐る恐るお銀様のあとを二丈ばかり間隔を置いてついて来る。お銀様は先に立って、儼然として、例の覆面姿で歩みを運びながら、ゆらりゆらりとこちらへ向いて練って来るのです。一筋道ですから、それは当然、この米友があらくを切っている現場のところへ通りかかるに相違ありません。

お雪ちゃんは隠れるともなしに、姿を後ろの林に隠してしまいました。

米友は再び鍬をとって、黙々として木の根起しに取りかかります。

人家のない胆吹尾根の原ですから、近いようでも遠く、姿ははっきり認めてからでも、あのとおり、ゆらりゆらりと練って来るものですから、この場へ来かかるまではかなりの時間を要します。

お雪ちゃんが、この場を外したのは、特にお銀様という人に好意が持てないわけではなし、悪意を芽ぐませているというわけでもないのですが、何となく気が置けて、不意に当面に立つことをいやがったのでしょう。

米友には、そうして、お銀様を避けなければならない心の引け目というものが少しもないから、引き続いて木の根を掘りくずしに取りかかっているぶんのこと。

「友さん」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com